無塗装の角島灯台がもたらすもの

すっぴんの灯台に恋をした

取材・文
中根 萌

協力
星野宏和（伏木海上保安部）｜髙月鈴世（下関市教育委員会）

灯台は航路標識である。海にいる人々は灯台を目指し、土地に住む人々は灯台を守る。現役の灯台でありながら、国の重要文化財でもある角島（つのしま）灯台は、その象徴的存在だ。映画のロケ地にもなった美しい角島と、無塗装を特徴とする角島灯台を紹介しよう。

ブラントンの最高傑作

角島（つのしま）灯台は、山口県西部、下関市豊北町の沖合1.5キロメートルに浮かぶ角島に立つ灯台だ。現役の灯台であり、2020年に国の重要文化財に指定された。灯台を中心に整備された「角島灯台公園」には、灯台記念館、展望ギャラリー、多目的広場、憩いの広場があり、散策路で結ばれている。灯台内部には105段のらせん階段があり、踊り場まで登ることができる。取材当日は風が強く、地上から上部までの高さ30メートルを思うと、足がすくんだ。

角島灯台は、明治政府最初のお雇い外国人、リチャード・ヘンリー・ブラントンの最高傑作と称される。ブラントンはイギリスのスコットランド出身の土木技師で、7年半にわたって日本に滞在した。30基近くの西洋式灯台と2艘の灯船などの建設に携わり、その功績から「日本の灯台の父」と呼ばれる。彼の設計による意匠は内外ともに重厚かつ華麗で、文化的・歴史的にも貴重な近代化遺産として高く評価されている。

灯台の隣には、レンガ造りの旧吏員（りいん）退息所が保存されている。これはかつて灯台職員の宿舎兼事務所だった建物で、現在は角島灯台記念館として活用されている。こちらも国の重要文化財に指定されている。

すっぴんの灯台

角島灯台は荒磨きの花崗切石で築かれている。花崗切石とは、花崗岩を加工して作られた石材のことだ。角島灯台上部には切込みを入れた石が用いられ、装飾的で柔らかな印象を与える。石材は瀬戸内海の大津島産と考えられている。山口県、特に大島郡周辺は江戸時代から優れた石工を多く輩出し、瀬戸内一帯で活躍していた。

角島灯台はいわば“すっぴん”――無塗装の灯台である。塗装しなかった理由は定かではない。ブラントンの手記には「石造りの灯台はすべて切石を積み、その素材の大部分は良質の花崗岩を用いた」とだけ記されている。石の美しさや風合い、石積み技術の高さを活かすため、塗装を避けたのではないかと考えられている。

明治期の灯台に詳しい海上保安庁伏木海上保安部の星野宏和さんはこう話す。「明治期の灯台表（国内の灯台の情報を記載した書誌）には一度だけ角島灯台が『白色塗装』と記されたことがあります。でもその翌年の記録では『無塗装』に戻っている。実物にも塗装を剥がした痕跡がないため、誤記の可能性が高いと考えています」。

無塗装である理由は不明ながら、類を見ない美しさをもつ角島灯台。ある人は島で、またある人は海からこの灯台を眺め、恋をしたのだ。

海と人が集まる場所――下関

角島灯台が位置するのは、下関を中心とする海峡エリアである。近代化にあたり、この地において灯台は欠かせない存在だった。欧米列強諸国との貿易協定により、交易船の安全を確保するためだ。標識の整備がこの地にもたらした恩恵は計り知れない。瀬戸内海と日本海を結ぶ海上交通が活性化し、下関は物流と貿易の要衝となり、近代日本の海運を象徴する都市の一つとして繁栄した。

角島灯台のある角島は、2000 年に角島大橋が架けられるまでは、船が唯一の上陸手段だった。開通当時、角島大橋は無料で渡ることができる離島架橋としては、日本最長を誇った。

さらに開通直後、トヨタ自動車「レクサス」の CM 撮影地となったことで、その美しい景観が全国的に知られるようになった。CM を機に観光客が急増し、灯台への来訪者も増えた。2015 年には年間 10 万人を超え、コロナ禍で一時減少したが、近年は回復傾向にある。

「歴史の舞台としての下関」を訪れる人々にとっても、灯台は旅の目的地の一つだ。それは角島灯台や、関門海峡の西口に位置する六連島（むつれじま）灯台が、「海運が安定し、港湾都市としての経済基盤が築かれた」という歴史を語る上で欠かせない存在であるからだ。

角島は木村拓哉主演の 2006 年放送のドラマ『HERO 特別篇』（フジテレビ）のロケ地として“聖地巡礼者”が急増した。アニメや映画のロケ地だけでなく、ゆかりのある土地や場所を訪れる「聖地巡礼」の流れは今も続き、SNS などを通じて新たなファン層を呼び込んでいる。全国の灯台を擬人化し、その歴史や文化的価値を伝えるメディアミックスプロジェクト『燈の守り人』（ワールドエッグス）などのコンテンツの影響も大きい。さまざまなコンテンツをきっかけに灯台そのものに関心を寄せる人々も増え、角島灯台もその文脈の中で再び注目を集めている。

物語を描く灯台

人々の暮らしが変わっても、同じ場所に在り続けることで灯台の存在感は増していく。一方で、GPS など通信技術の発達により、灯台の役割は次第に曖昧になりつつある。だからこそ、“そこにただ在る”という価値――地域のシンボルとし

角島灯台公園内にたたずむ角島灯台

1/2 | 3

1/ 下関市立考古博物館でインタビューに答える髙月さん。　2/ 角島灯台建設に使用された花崗岩（御影石）　3/ 本州と角島を結ぶ角島大橋。

ての再評価が求められている。

「ここに住む人々の歴史と物語が重なっているように感じます」。下関市教育委員会の髙月鈴世さんは角島灯台についてそう語る。角島灯台の重要文化財指定に関わった人物だ。

髙月さんが灯台と関わるきっかけは、下関市に現存する「旧組礁標」だという。礁標とは、海中の岩礁上に築造する航路標識のことだ。旧組礁標は、明治 4（1871）年に設置された当初は明かりをもたなかったが、明治 23（1890）年に明かりがつくよう改変された。その後、岩礁上から岬に移設され、灯台（金ノ弦岬灯台）になった。旧組礁標（旧金ノ弦岬灯台）もブラントンが設計したものであり、六連島灯台とともに重要文化財に登録されている。

角島灯台は 2025 年に建築 150 周年を迎えた。髙月さんは取材時、記念イベントの準備に奔走していた。夜間公開や、角島灯台最後の灯台守（御年 85 歳！）による講演会、限定 1 組のキャンピングカー宿泊ツアーなど、多彩な企画が進められていた。ツアーは官舎に泊まり込んでいた職員の気分を味わえる趣向だ。

「千葉県銚子市の犬吠埼灯台や、静岡県御前崎市の御前埼灯台と比べると、角島灯台の地域全体で盛り上げようという機運は、まだ少し弱いかもしれません。だからこそ、今回の周年イベントは観光客に向けたアピールだけでなく、地域住民が『灯台はこの地のシンボルであり、守り伝えていく存在だ』と再認識できるような契機にしたいと考えています」と髙月さんは話す。

灯台と未来

すっぴんの灯台に恋をする。古くからそこに暮らす人、それを守る人、そして新たな旅人が。

角島灯台は“標識”だ。その光の先には数多の物語がある。灯台は建造物であり、文化財であり、そしてそれを超えた存在でもある。

灯台は人々を照らし、同時に人々によって照らされる。角島灯台は陸と海を結ぶ交通インフラ整備の先駆けとなり、「近代化の象徴」の一つとして歴史を重ねてきた。それは暮らしに溶け込み、水に、川に、海に注いでいく。恋とは、次の世代につなぐべき希望だ。